

全国二次障害問題シンポジウム 参加報告

NPO 法人自立の家事務局長 小林 祐美

闘病中の小佐野氏(障害者医療問題全国ネットワーク副代表NPO法人自立の家代表理事)の代理として、「障害者医療問題全国ネットワーク(以下、「医療問題ネット」と略す)」の役員会に参加する事になった。私(小林)自身は、第一回と前回のシンポジウムに参加するにとどまっていたため、「医療問題ネット」の内情には詳しくない。

私の従事する法人は、「医療問題ネット」の連絡先になっているため、日常的に二次障害等についての問い合わせがある。小佐野氏と共に「医療問題ネット」の事務局長である菊野氏も従事しているが、二次障害の重度化のため現在休職中である。

そのため二人に代わり、ここ一年半は、「医療問題ネット」に精通していない私が、二次障害等の問い合わせに応える形となった。問い合わせの内容を通して感じた事は、問い合わせしてくれた方々に共通な事と

して、『適切な医療機関がなく、結果として漂流している事』そして、『痛みや不安に苦しんでいる方が孤立している事』だった。

私自身も50歳の半ばを過ぎ、そして身近な人が医療(機関)との関係を深める状況の中、事業体として障害者総合支援法などの闘いに終始している場合ではないとの思いが強まっていた時期でもあり、健康と医療を課題とする「医療問題ネット」への参加は、自然な流れとして受け入れる事ができた。

昨年9月頃、大阪の肢体障害者二次障害検討会代表の高橋弘生氏より「大阪で二次障害問題に関するシンポジウムを開催したい。その講師として小佐野氏を招きたい」という申し出があった。しかし、小佐野氏は外出もままならない病状で、とても希望には添えないと伝えると、大阪の高橋氏はひどく困惑された様子だったので、「医療問題ネット」の役

お詫びと 障害者医療問題全国ネットワーク の現状について

まず、大変ご無沙汰して申し訳ありません。

突然ですが、平成26年5月4日「ホタテおばさん」こと安倍美知子さんが、大腸ガンでお亡くなりになりました。享年60歳でした。

それに伴い、夫であり副代表であり「けんこう通信」の編集長でもあった小佐野が看病に専念したいと会の活動から離れ、また、安倍さんが亡くなれた後、自らも、GIST(消化管間質腫瘍)に侵されていることが判明、闘病の甲斐なく、平成27年7月8日亡くなりました。享年57歳でした。

正直、要の小佐野を欠き、「障害者医療問題全国ネットワーク」は機能不全に近い状態に陥り、けんこう通信の発行もママならない状態にあるのが実情です。

新たに、自立の家の小林氏を迎え、体制の再構築と、今後の活動方針を検討中です。

今回の安倍さん、小佐野の状況を鑑みるに、改めて我々障害者の健康管理の難しさを痛感し、我々の存在意義を再認識している次第です。

今号は、さしあたって、今年二月に小佐野の願いでもあった他団体との交流として、「全国二次障害問題シンポジウムinおおさか」への参加に関して、小林よりの報告にとどめさせていただきたいと思えます。

新たな体制が固まり次第、「けんこう通信」の定期発行を再開するつもりでおります。

それまで、少々時間をいただきました。存じます。

員会で検討することにした。

昨年11月「医療問題ネット」の役員会において、大阪の高橋氏の要請を検討し、これまでのシンポジウムの形を継承することが出来ないかもしれないが、関西圏の仲間と交流し、「医療問題ネット」の前進を図ること、そして大阪での二次障害問題に関するシンポジウム開催に全力で協力することが確認された。

さらに、本年1月の「医療問題ネット」の役員会において、駒村氏(障害者医療問題全国ネットワーク代表)を関東圏のシンポジストとすること、駒村氏をはじめとし10名のメンバーを派遣することに決定した。

2月15日の『全国二次障害問題シンポジウムinおおさか』の開催にさきがけ、前日夜、宿泊先のホテルの大広間で交流会が開催された。約50名の参加があり、主催の「肢体不自由二次障害検討会」、賛同団体の「障

害者医療問題全国ネットワーク」、「全国肢体障害者団体連絡協議会」の参加者一人ひとりが挨拶を行い交流を深めた。ライトアップされた大阪城をバックに全員で記念撮影を行い前夜祭は終了した。

害者医療問題全国ネットワーク」、「全国肢体障害者団体連絡協議会」の参加者一人ひとりが挨拶を行い交流を深めた。ライトアップされた大阪城をバックに全員で記念撮影を行い前夜祭は終了した。

2月15日シンポジウム当日は朝から快晴で、午後1時より大阪府立男女共同参画・青少年センターを会場に開催された。会場は約90名の出席者があり大盛況の中始まった。司会進行の「肢体障害者二次障害検討会」事務局の増澤氏が開催を宣言し、シンポジストの紹介の後、小佐野氏からのメッセージを小林が代読した。

シンポは、「肢体障害者二次障害問題検討会」のメンバーで医師の大井通正氏より現状・問題提起がなされ、駒村健二氏

(障害者医療問題全国ネットワーク代表)
渡邊寛氏

(愛知肢体障害者ごぶしの会事務局長)

片山雅崇氏

(滋賀肢体障害者の会みずのわ会長)

竹内三紀子

(頸椎症を学びあう会代表)、

高橋弘生氏

(肢体障害者二次障害検討会代表)

の順で報告がなされた。質疑応答のうち、別紙(6ページに掲載)にあるアピール文を採択し『全国二次障害問題シンポジウムinおおさか』は大盛況の中終了した。

シンポジウム終了後、主要メンバーが集まり、次回シンポジウム開催前に、東京で交流会を持ちたい旨の内容や定期的な情報交換する事などを約束し、会場を後にした。

個人的な感想であるが、私の周囲は、障害者総合支援法を中心とする施策の進行による管理強化と分断で、個人の尊厳や生活はさいなまれ続け、当事者も支援者も疲弊している現状がある。その時期に、(状況



前夜祭の記念写真

2015年3月6日



開会直前のシンポジウム会場



パネリストの面々

全国二次障害問題シンポジウム アピール

冬未だ半ばの今日、「二次障害」に何らかのかたちに関わり、取り組みを進める五地域の団体が集まり、交流を行った。「二次障害」は、五十年程前に日本において認識され、その言葉が生まれ、「障害のある人の権利に関する条約(以下、権利条約)」の長瀬氏、川島氏の訳においても記述されるなど認識が広まり、対策が求められる状況になってきている。それにもかかわらず、国にはその対策の窓口すら決まっていなかった。また、全国各地に様々な形で「二次障害」に悩む人がいるであろうにもかかわらず、この課題に団体として関わるのは、極めて僅かであった。「二次障害」は、「成人障害者にみられるもともとの障害の悪化またはあらたに出現した症状や障害のことで、しばしば動作能力の低下をとまなう。二次障害発症の原因として、もともとの障害(一次障害)に加齢(年を重ねる)の影響が加わるだけでなく、その障害者の置かれている生活や労働の状況の影響が推測されている」とされ、障害のある者は誰もが何らかのかたちでその状態に至り、社会参加の土台としてのそれぞれの健康に影響し、社会参加の状態が大きく変わることがあり得る。

しかし、その人に、その障害に合った作業環境や生活環境があることや、その人、その障害に合った適切な医療を適切に受けることができることにより、「二次障害」の状態に至ることを遅らせたり、軽減できる可能性があり、その具体的な対策が早急に求められる。

また、「二次障害」は、就労を始めとした社会参加が進む中で、顕在化してきた歴史がある。社会参加が悪いわけではなく、社会参加するに当たっての障害の部分への支援の有り様、即ち、合理的配慮等の不足の結果でもある。その意味でも、権利条約が求めることは、「二次障害」に関わっても、その解決のための方向性と、具体的な対策を求める根拠ともなる。権利条約は、単なる障害者団体の要望書でなく、国連の総会において決議された、世界で求められる国際基準として位置付けられるものである。

そして、この条約は日本国政府の立法府である国会において全会一致で採択され、世界が日本国の批准を認めている。日本国憲法においても、言うまでもなく、その十三条や十四条、二十五条等の当然の履行がなされるならば、権利条約の中身と全く相反しないものであることは言うに待たないが、その九十八条において、国際条約の位置付けが、憲法の基、国内法の上位に位置するものであり、国会の批准が国内法に整合性を求めるものであることが確認できる。

改めて権利条約や、医学の知見や現状、様々な障害支援の有り様にも注視し、学びながら、今日集まった五地域の団体だけでなく、全国に隈無くいる「二次障害」不安を抱えるなかま、「二次障害」と言う認識に至らずに苦しむなかまに対し、情報を発信し、少しでもその解決に繋がる連携を深めることを何らかのかたちですすめていきたいと考える。我々だけで、この課題が解決するわけではない。

そのために、まずは、今日集まった五団体の連携を今後も何らかのかたちですすめていくことを改めて確認する。

2015年2月15日

駒村 健二 (「障害者医療問題全国ネットワーク」代表:東京)
 渡邊 覚 (「愛知肢体障害者こぶしの会」事務局長:愛知)
 片山 雅崇 (滋賀肢体障害者の会「みずのわ」会長:滋賀)
 竹内 三紀子 (「頸椎症を学びあう会」代表:京都)
 高橋 弘生 (「肢体障害者二次障害検討会」代表:大阪)

編集後記

まずは前号の訂正をさせていただきます。

前回の「めげちゃいけない私の体験記」の5ページ3段目の1行目と2行目の間に入るべき文章を編集時のミスにより、ほぼ一段に渡り文章を欠落させてしまいました。

「自分の『居場所が見つかった』と思い、ホッとした面がありました。また親の世界から離れ、ようやく子供同士の関係が持てたという開放感もあったと思います。北養護学校に通っていた時代に自分の障害についてどんな思いを持っていたかという点、私は比較的障害が軽かったことで、友人たちの「お世話係」という立場でした。友人たちの中には私より障害が軽い人も何人かいましたが、その人たちとも私は普通に仲良く遊んでいました。でも私より障害が重い人たちのお世話をすることも、私は嫌ではありませんでした。なぜなら担任の先生からは「お前は障害が軽いことから、障害の重い子のお世話をしなさい。生徒同士で助け合うことは良いことだ」と言われていましたし、例えば北療育園で夜中に看護婦さんに『隠れて』

ここに欠落した文章を載せるとともに、深くお詫びいたします。

冒頭にも書いた通り、我々は、今、困難な状況にあります。

でも、ここを乗り越え、より皆様のお役にたつ情報をお伝え出来るよう、体制を整えたいと思っています。もう少し時間を頂けるとありがたいです。